

## 偏見は差別

岐阜市立三輪中学校 1年 深尾 和弘（ふかお かずひろ）

ある日、祖母の部屋で、桜の模様の入った手紙をみつけた。それは、刑務所から祖母宛てに届いた、受刑者からの手紙だった。手紙には、過ちを犯してしまった後悔と共に「刑務所から出たら、〇〇ちゃん（祖母のこと）の作った手料理が食べたい」ということが書かれていた。

桜の模様の手紙が受刑者からの手紙だと知ったとき、僕は少し怖かった。罪を犯した人と祖母が知り合いなら、その人が出所したら祖母に会いに来るかもしれない。僕たち家族が何か怖いことをされたらどうしよう、と心配になった。その気持ちを祖母に話すと、祖母は悲しい顔をして、僕にこんな話を始めた。

手紙をくれた人は、祖母が働いていた児童養護施設の人だった。学校では仲間と悪さをするいわゆる問題児だったが、施設では、祖母の体調が悪いといち早く気付き気遣ってくれたり、よくお手伝いをしてくれたりする優しい人だったそうだ。しかし、学校では悪いことばかりしていたため、先生達からよく連絡がきたという。ある時、またその人は仲間と一緒に学校で悪いことをした。仲間の中にはPTA会長の子もいたそうだが、家にまで先生が来て叱られたのはその人だけだった。先生達はその人の悪いところばかりを話し、その時の悪さもその人だけが悪いと話した。施設の子への偏見もあった。祖母を感じるぐらいなのだから、その人はもっと嫌な思いをしたらどうしよう。悔しそうに顔をしていたが、一切何も言い返さずじっと話を聞いていたらしい。そんな様子を見かねた祖母が、先生に、「この子の悪いところは十分わかりました。でも、この子の良いところはないのですか。」と尋ねた。すると先生達は黙ってしまった。祖母がその人のよいところを話し始めると、それまで黙っていたその人が、ボロボロと涙を流し声も出さず泣いたそうだ。この子は悪い子と決めつけず、一人の人間として良さを認めてもらえたことが嬉しかったのだろう。その時から、その人は祖母を信頼したのだと思う。養護施設の職員は何人もいたが、手紙が届いたのは、祖母だけだったのだから。

祖母の話聞きながら、僕は自分が恥ずかしくなった。罪を犯す人は悪い人、と決めつけて、会ったこともない人のことを怖い人だと偏見の目で見ていたと気付いたからだ。罪を犯した人は、刑務所で反省して、人生をやり直そうとして出所するのに、僕のような偏見をもった人がいることを知ったら、とても悲しいし、また人が信じられなくなってしまうと思う。偏見は差別だ。自分が差別の心を持っていたことに落ち込んだ。

祖母は、そんな僕を見て、その人の話を続けた。その人はこの手紙を書き、出所した後また罪を犯し、刑務所に入ったそうだ。そうなってしまった原因は、やはり、僕のような世間の差別の目だった。出所してすぐは、差別されても、それだけのことを自分はしてしまったのだから受け止めるべきだと耐えていた。しかし、なかなか世間の目は変わらない。悲しみ

はどんどん募る。そんなときに、集まってくるのは、結局また悪い仲間。悪いことをしても止めてくれる人がいない。そして、また罪を犯してしまった。負の連鎖だ。改心したときに、その人の職場の人や周りの人が、偏見をもたず、一人の人間として温かく迎えてくれたら、再び刑務所に行くことにはならなかつたらう。そう思うと、ますます、偏見の目の恐ろしさがよくわかる。みんな同じ人間なのだから、今のその人に思いやりをもって接することがとても大切だと実感した。

二度目の罪を償って出所したその人は、結婚相手を連れて祖母に会いに来たそうだ。罪を犯した人への偏見をもつ人はいたろうが、その人の人としての優しさに気づき、人生を共に歩んでくれる人に出会えたことで、その人は、負の連鎖から外れることができた。祖母の手料理を食べながら、自分を受け入れてくれた人を悲しませないように、これから生きていくと笑顔で話したそうだ。今でもその人は罪を犯していない。

罪を犯すことはいけないことだ。被害者のことを思えば、許すことはできない。しかし、反省し、新しい人生を歩もうとしている人に対する偏見は、さらなる悲しみを生む。罪を犯した人が、普通の人生を歩むためには、本人の努力はもちろんだが、周りの理解が欠かせない。偏見を持たず、過去ではなく今のその人を温かく迎えてくれる人や道を外れようとしたら戻そうとしてくれる人が絶対に必要なのだ。僕も、今から偏見の心を捨て、出会う人を一人の人間として大切にしていきたい。そうすれば、罪を犯した人が普通に生きられるだけでなく、そもそも罪を犯す人も減るかもしれない。人が人として大切にされる権利、それが人権だ。誰もがもっている人権は、偏見の心をもたず、思いやりの心をもってお互いに大切にしようことで、守られる。まずは、自分が人権を大切にしたい。